

高級レストラン

好枝

高級レストラン

平栗好枝

夫が、検査のため二週間ほど入院することになった。

思いがけない有給休暇のプレゼント。

なにからやろうかと、心が騒ぎだした。

とにかくまず主婦としては、家の中の整理などをやりながら、ゆっくりと計画を練ることにした。楽しみが控えていると思うと掃除なども苦にならないからおかしなものである。

かなりたまっているストレス発散のチャンスだし、これから数日はとにかく好きに使える私のプライベートタイム。と、考えてきて、

待てよ。すべて私が見えろわけではないのだ。何日かに一度は病院に行かねばならないし、何日も家をあけて、旅行になどいけそうにもない。それに考えてみれば、かたづけなければならない雑用もたくさんあるわけだし。そうすると結局、大型休暇などではないのだ。

「なーんだ。つまらない」

ふくらみかけたフーセンが少ししぼみかけた。

大体すべて自分の時間だなどとはやとちりしたのが私の間違い。そんなに暇な日々が簡単にできる筈はないのだから。

とは言うものの、そんな中で何をやったら私にとってベストなのだろう。そう考えていたが、実は以前からあたためていた計画があったのである。

それは、高級レストランか、料亭に一人で入ってゆっくりと食事をする、であった。それも半端ではない、超一流のところである。

しかし、それを実行するにはやはり準備が必要だ。まずお金、全身のドレスアップ、そして何より心が落ち着いていなければならないだろう。よし一日か二日でその心構えを整えてみよう。

そんなことにはほどとおい格好で夢を描きながら、掃除や洗濯をしていた私の耳に、テレビがああニュースを伝えていた。

ある高級料亭での食材の使い回し事件のことである。私は信じられない思いで聞いた。

別にそのお店に行くつもりはなかったが、他の店でもあるいは、などと余計な危惧を抱いてしまう。清水の舞台から飛び下りるくらいの散財であり、冒険に近いことをやろうとしている私にとって、そんないい加減な食事の席につきたくはない。

と、まあ偉そうに思ったりしていた。

そうこうしている間に、自治会の会費の集金の依頼やら、前から予告のあった、部屋の補修の日が早まってしまった。

「なんだよ。もう」

辺りの物を蹴飛ばしたいくらいに私は腹がたってしかたがなかった。しかし、落ち着いて考えてみれば、初めから少し無理な計画だったかもしれないのだ。ザワザワとした雰囲気を引きずりながら行ったとしても味などわからなかっただろう。こうゆうことにはやはり機、というものがあろう。

だが、たとえ大幅な計画はつぶれようと、このまま中止するのは悔しい。

少しの時間でまねごとでもいいから、何かないかと考え、結局、近くのデパートのレストランで優雅、とまではゆかなかったが、家から近いという安心感だけで、時間的にはゆっくりと食事をして終わった。

普段やってることと、たいして変わらないことで何となく納得はしてはいないが、中央線の事故続きで都心になど出なくてよかったのかな、などと、たかが食事を食べるだけなのに、疲れてしまった。

張り切ったわりには、超豪華な所にはやはり縁がなかった。

でも、そのうち絶対にどこかで冒険してみようと思っている。

数日後、夫は何事もなく帰宅した。

平成二十年七月

課題「冒険」